

は、現はれて來た時と同様に、誠に、急に、一月末までには視界から去つた。あはて者は之れがハリ彗星かと、早合點した者もあつたけれど、決して之れはハリ星でなく、全く偶然お出でた飛入り客であつた。

待望のハリ星は、1907年頃から、既に學界の話題となつてゐたが、實際之れがほど豫想の位置に發見されたのは、1909年九月11日で、發見者は獨乙のハイデルベルグ天文臺のヲルフ博士であつた。そして、近日點を通過したのは翌1910年四月19日であつたが、其の頃から、愈々肉眼にも見えるやうになつた。當時は、毎日の早曉に可愛らしい尾を引いてゐた。

自分等の記憶にある此のハリ彗星の絶大な壯觀は、1910年五月20日の曉天の姿であつた。暫く悪い天氣が続いたので、毎日、氣にしながら、彗星はどうだらうかと心配してゐたが、果然、五月20日の朝、幸ひに早く眼がさめて、寄宿舎の東窓を開けて見たところ、殆んど全く晴れた空に、東山の背後から、金星の傍を過ぎて、大きいサーチライトのやうな力強い光芒が天に沖し、其の尾端は、子午線を越えて、西天にまで届いてゐた。“アッ！”と驚いたまゝ、自分も友人も、只、口を開いたまゝ、此の奇觀に聲も出なかつた。少し心が落ちついてから、自分は手早く天のスケチをしたが、其のスケチは今も尙ほ自分は書庫に保存してゐる。近いうちに之れを複寫して、“天界”誌上に載せたいと思つてゐる。

其の日(1910年五月20日)11時過、ハリ星は太陽面を通過した！ 之れも仲々の前景氣であつたが、自分は森教授(今の三高校長)の御許しを得て此の通過する有様を透影して見た。しかし、何も見えなかつた。彗星は透明體だつたのである！

其の年、五月末から六月初めへかけて、日々遠ざかり行く此のハリ彗星は、惜し氣もなく其の美しい姿を、毎夕の西天に見せた。之れも實に今から思ふと楽しい思ひ出であつた。こんなことが、やはり、迷つてゐた自分を馳つて、天文を生涯の友に決定して了つたのであつた。

こんどのカニンガム彗星は、月の關係上、今十二月17日頃から毎夕の西天に見える筈である。日と共に、光や尾は増して、一月6日の夕までは見事な姿が地平に近く、見られるだらう。それから太陽への内合が近づくため、全く見えなくなつて、只、南半球の人々には、近日點通過の15日頃から朝早く東天に見えることとなるだらう。

## 辛巳年頭書懷

|                                                      |                                         |                             |
|------------------------------------------------------|-----------------------------------------|-----------------------------|
| 乾 坤 曆 改                                              | 瑞 氛 雄 <sup>ナリ</sup>                     | 喜 色 新 鮮 千 里 同 <sup>ジ</sup>  |
| 銃 後 夜 勤                                              | 燈 火 白 <sup>ク</sup>                      | 社 前 朝 拜 旭 陽 紅 <sup>ナリ</sup> |
| 黔 首 宜 <sup>シク</sup> 爲 <sup>ス</sup>                   | 一 <sup>レ</sup> 心 誓 <sup>ラ</sup>         | 共 俱 招 寄 泰 平 風 <sup>セン</sup> |
| 宏 胸 溢 <sup>ハ</sup> 外 扶 隣 <sup>ニ</sup> 德 <sup>ヲ</sup> | 堅 腕 充 <sup>ツ</sup> 中 報 國 忠 <sup>ニ</sup> |                             |

神戸關守畔 改發香塢